神道史上における沖ノ島の祭祀

講演録

椙山 林継　國學院大學名誉教授

１．はじめに

神道また神道以前における神道的祭祀を考えると、だれが何を、どこで、どう祀るか、それが、どのように固定化、儀式化していくかということでありまして、さらにその儀式化したものがもっと広範囲で一般化するのはどういう条件が必要なのかと、いうことであります。これが特色を持つ神道祭祀としての成立になるかと思います。

沖ノ島の祭祀については、非常に特殊なマツリであるという言われ方もしている一方で、先ほど笹生衛先生、篠原祐一先生から話されましたように、ある面では日本全国のマツリの中で押さえることのできる部分も、かなり大きなものがあります。そういう両者を考えますと、どのように沖ノ島祭祀を考えていったらいいかということですが、順をおって述べていきたいと思います。

２．祭祀の始まりについての神話伝承

⑴　アマテラスとスサノオ

なぜあのような神話伝承が起こっているか考えてみなければならないと思います。

ご存じのとおり、沖ノ島の三女神これはアマテラスとスサノオとの間に誓約によって生まれた神だということを古事記も日本書紀も言っております。他の海の神は、オオワダツミの神にしてもツツノオの神にしても、これはイザナギが禊をしたとき、海の底に潜ったときに生まれた神だといわれています。この違いはいったい何なのか？宗像三女神も場合によってはそういう言い方ができなかったことはないと思いますけども、スサノオの子供だ、という言い方で位置づけられる、それはいったい何を意味しているのか、ということであります。これはまだ私も必ずしも正解を得ているわけではございませんが。アマテラス神話とスサノオ神話の接点であり、その最も重要な部分として考えられる神話に登場してくる神であるわけです。一方では、アマテラスの後継者が出現するのですから。あるいは、この神話はもともとスサノオ神話の内にあったものに、アマテラス神話が結びついたかも知れません。

⑵　海の中道

もう一つは、海の中道ということであります。海の中道とは一体何か？海の真ん中にある道だから、海の中道なんだということでいいか、ということでありますが、私はどうも、朝鮮半島と日本列島との中にある道、と見ざるを得ないだろうと考えております。で、この海の中道にしてもいろいろと問題があります。

先ほど白石太一郎先生の引かれた中には出てこなかったのですが、海の中道に降りて、スメミマの為に斎き祀られよということが出てきます(「海の中道に降り居まして、天孫を助け奉り、天孫の為に所祭(いつかれ)よ」(『日本書紀、一書』))。つまり、もともと、大和朝廷によって祀られなければいけない神であったという風に考えたほうがよいと思います。これは出雲大社、いわゆる杵築大社も国を譲ってくれた神であるから、宮を作って祀るのだ、ということが大きなマツリの根本的な理由になっているという風に考えると、沖ノ島だけではなくて、宗像の神はやはり、朝廷が祀らなければいけない神だ、ととって良いのではないかと私は考えます。

３．考古資料から見た祭祀の年代と内容

⑴　三角縁神獣鏡

これにつきましては、東京で発表した時にも皆さんから少しお叱り、というか注目をうけたのは、私が３世紀からあるのではないかという言い方をしたもので

すから、これはまあ、私の一つの独特な言い方なのかもしれませんが、いわゆる三角縁神獣鏡はいつまで作っていたかという問題であります。確かに、沖ノ島から出ているものは、やや古手のもの、これは本当の出土でないのですけれど、そういったものがありますし、かなり新しいものもあることも事実だと思います。しかしそれがいつからいつまで作られていたのか、私はどんなに遅くても４世紀の初めまでしか作っていないだろうと思います。三角縁神獣鏡の中に、出雲の神原神社古墳などから出土している景初三年の銘が入っていながらもそれほど古い部類に入らない気もしますし、そういう風な状況をみていますと、三角縁神獣鏡に出てくる年号は、景初三年とか、あるいは正始とかいう年号です。これは、魏によって冊封を受けているとして使用している魏の年号でありますから、魏の時代を知っているメンバー、ということになりますと、三世紀代、魏がなくなっても、魏鏡として作っているとは思えません。本格的にはもう作らなくなっていると思います。それで私は、三角縁神獣鏡は全て日本製であるという説なのですが、いずれにしてもそういう考え方をもっています。そうすると、白石先生も沖ノ島の祭祀、少し年代を上げて考えていただいているような気がしますが、私は、まあ、３世紀ごろからあってもいいんじゃないかと思っています。

そして、もう一つはA.D.360年代の百済・新羅との関係で出てくる問題ですが、その時期は大変大事な時期であると考えておりますし、その時期から始まってもいいと思いますが、私はもう少し早くからあったのではないか、という気がしています。そうして、崗県主と宗像の君との関係でございます。これは、あとで触れますが、いずれにしましても私は、始まりは、３世紀からはじまっていいのではないか、そういう風に考えております。

⑵　環頭大刀

それから、遺物の問題としましては、環頭大刀、もしこれが新羅との関係が非常に強いとするならば、もっと環頭大刀があってもいいのではないかという気がします。確かに、頭椎大刀の頭のかけらの金具が出ておりますし、あるいはもっと新しいかと思いますが、水晶の三輪玉等があって、あとは捩じり金があるので、和装の大刀があることは事実だと思いますが、あまりにも環頭大刀が少なすぎる、というか、ほとんどないようですが、それは、抜かれているかどうか？まあ、私は沖ノ島の遺物があれで全部だとは思っていません、神の島として保存がよかったと聞き及んでいますが、しかし、極端な言い方をすれば、私は約半分くらい無くなっているのではないかというくらいに思っています。そういう意味からいえば、環頭太刀などは目立つものなので、無くなっても仕方ないのかな、という気がしないでもないのですが。

⑶　ガラスの切子玉

先ほど篠原先生が石製品について報告してくださいましたが、玉類は、先ほどの私のカットガラス碗の報告と関係させると、ガラスの切子玉があります。新しい時代のものですが、東大寺三月堂の不空羂索観音の宝冠にあるものとほぼ同じだと思いますので、時代としても本当は比べてみたいものです。今展示中で頭上から降りてきている、と思いますが、というようなものがあります。そんなに、全国で余計にあるものではないと思います。

⑷　半島製品は直に宗像に入ったか

その様なものの中で、問題は明らかに半島製であろうといわれているものが金製の指輪、その他があるのですが、これは一体、一旦ヤマトに行ってから宗像へもたらされたものか、それとも直に沖ノ島でおろされたものか？ここら辺の問題、例えば、呉の織姫の問題がありますが、あの織姫はいったん行ってから戻ってきているのか、それとも、途中で宗像の神が欲しいといって、とりあえずそこで差し上げたのか、その辺の問題を含めて、遺物がどう移動しているかということは、考えてみなければいけないと思います。

４．遺跡からみた祭祀方法の復原

⑴　祭場はどこか

遺跡のあり方、それは先ほど篠原先生も笹生先生も言っておりましたが、マツリのあり方がいったいどう

なのかということであります。全て沖ノ島へ行って、マツリをしてそしてそのままお供えしてきたという、この考え方は、一つの考え方でありまして、沖ノ島へ行ってマツリをしたとしても、どこでマツリをしているか、そして、その後移動していないかどうか、７号、８号あるいは６号でも木を切り払えば、それなりの広場があるかとおもいますが、しかしそれ以外のところでは非常に困難である。とくに先ほど出ました21号などではいったい何人の人が、かなり大きい岩ですから、10人やそこら乗って乗れないことはないと思いますが、しかし、そこでマツリを本当にやっているんだろうか、そこは少し、実は気になっているところであります。そしてさらに１遺跡１回のマツリではないと私も思っております。つまり、何回か同じ場所、前のものがあってもそのまま、場合によってはそこでマツリを行っても良いし、そこに納めても良いと考えております。ですから、マツリのあり方について、やはり、みていかなければならないだろうと考えております。

それから、沖ノ島の遺跡の問題としてはさっきの話の、篠原先生がクラといっておりましたが、海の遺跡ですから、海中に、奉納したって良いわけなのです。いくら大切なものであろうと、海の中に放り込んで、それでマツリをやればそれでもいいはずなのですけれども、それをなぜ島のあの場所へ納めているのかということも考えなければならないと思います。一般的には海中投供といいますか、そういう祭り方法があるということです。

⑵ 祭りの人数

そこへいったい何人の人が行っているかということですが、前に日光男体山の頂上の遺跡についても書いたことがあるのですが、あれも山のふもと、平野部で大規模に大勢の人が参加してマツリが行われていたであろう。頂上へ持って行って埋納しているのは、ほんの数人の人たちがやっていただろうと。ま、その場でのマツリもあったかも知れませんけれど、しかし大勢でのマツリを考えるとそれなりの、あるいは田島の地で、マツリをしていいのかも知れません。そのことをどう考えるか見ていかなければならないと思います。

５．沖ノ島の立地環境からみたマツリの意義

⑴ 祭祀集団

海ノ中道についてのことなのですが、これは名づけて道主貴とか、そういう名前が出てきますので、やはり、いかにこの玄界灘の交通が大事であったか、そういうことであります。そして、白石先生が言われたように壱岐・対馬これが魏志倭人伝の記載からいっても、当然、このルートが安全ルートであるし、大勢の移動するルートであることは事実だと思います。私は昔、これはあんまり昔で今はもう言わないのですけれども、白石先生も言われたいわゆる関釜連絡船のこのルートは、軍事ルートであると、かつて話していたことがあります。そして問題は仲哀紀に出てくる崗県主の「なしおの所」を献じたことであります。この時には宗像氏は出てこないのでありまして、崗の次に出てくるのは伊都です。そして献上している「なしおの所」は、広く見るのと狭くみる見方があるのですけれども、私は玄界灘全域のように思います。東は山口県の西部から、そして壱岐対馬のわたり、大渡といいますが、西側は壱岐・対馬のラインである。これをどうも崗県主が献上しているように思います。そうするとですね、私は崗県主が、沖ノ島のマツリあるいは宗像のマツリをかつてやっていたメンバーであって、その献上したことによって、仲哀紀ごろから宗像の君が祭祀集団として、これはだれか、篠原先生か笹生先生、どちらかかかれていると思いますが、祭祀集団としての宗像の君が成立していく、そういうものじゃないかと思います。そうするとA.D.360年代という年代は非常に大事な時期であることも事実だと思います。ということで祭祀集団の問題があります。

６．現代に至る祭りの継続

沖ノ島のマツリが今に、現在に継続しているということの重要性であります。これらの神話伝承がひかれながらマツリが行われてきて、かつてのマツリについては祭祀の遺物等があるわけですから、わかるわけですが、さらにいうならば、現代にもそれを継承しながら続けているということは、沖ノ島祭祀の一番大きな

問題だろうと思います。実は瀬戸内海にもいくつかの島がありまして、祭祀遺跡があります。しかしそこで祭祀が続いているかというと、続いている所は実は少ないわけでして、岡山の高島は、現在でも下に神社がありまして、信仰が続いているといえば続いています。しかし、継続性について証明できるかというとなかなか難しい問題がありますが、いずれにしましても児島湾のかつての入り口、そこにあった島で、上に大きな岩があって、船の上からよく見えたと思いますが、高島明神といっておりますが、このように続いていることは、宗像の田島と同じように呼子の田島も重要だと思いますが、宗像の地が古墳時代ばかりでなく、その後の律令祭祀等を受けながら、中世も、近世も今に至るまで祭祀が伝わってきたということは、やはり大きな問題だろうと思います。

⑴　日本の祭祀の特徴

日本のマツリは、ほかのマツリと少し違っていると思います、これは全世界的に見ていった場合に、日本のマツリほど食べるものを気にしているマツリというのは、私、無いように思うのです。もちろん東南アジアでもあることはあるのですが、日本のマツリは神様の食し上がりもの、つまり、食べ物を非常に気にしている、その最大の問題は、やはり人間と非常に近い存在に神を見ているからだろうと思うのですが、自分たちが腹いっぱい食べられる、うまいものが食べられる、ということは、やはりうれしいことであるし、何か頼まれれば聞いてしまう、そのためにはやはり腹いっぱい食べさせてもらうということが、重要なのだろうと思いますが、神観念そのものが基本的にそういう考え方があるから、だからやはり食べ物を供えるのだと思います。

この、沖ノ島の場合には土器が片付けられているのは仕方がないとしてもいったいどのくらいの食物、神饌が供えられていたのか考えてみないといけない問題だろうと思います。それは、祭場の、マツリのあとの始末の問題も含めて、つまり古代、これまでのマツリの復原を考えていく時に一筋縄でいかないところがいくつかあると思います。その中で沖ノ島の祭祀というものが、実は、日本の神道、神道の祭祀、神道といいますとかなり後世であることになりますので、神道というか、それ以前、プレ神道を考えていく上で、宗像というものは非常に良い例、一つの典型的な例であります、つながっているものとして。例えば有名大社でもなかなかつながっているということを確認できないのです、たとえば伊勢の神宮でも石製模造品が出ています、出土していても、その後のマツリがどう継承されるのか、文献の方では言えるのですが、考古学の方ではつながりを確認することは困難であります。もちろん先ほど言いました賀茂あたりもそうですし、日本のなかで有名な古社は、ほとんどが４～５世紀の石製模造品の祭祀遺物を持っています。持っていますが、それがどうつながりを現代に持ってきたかということが言えるのは沖ノ島だけということです。またいろいろな角度で考え直しながら、こうも考えられる、ああも考えられるということを考えながら、具体的に、もし宗像氏が祭祀集団であったとしても、朝廷との関係で、どういう祭祀命令が来ているのかということも含めて、考えなければならないと思います。

ちょうど３時になりましたので、ここで終わります。

註）本稿は、第５回「宗像・沖ノ島と関連遺産群」専門家会議で講演したものの採録である。